

棕鳩十賞（小学校1・2年の部）

「かば森をゆく」 理論社

長野市立加茂小学校 二年

とや ゆきな
戸谷 幸菜

なまけものとよばれたかばは…

なまけものとよばれていたかばの正体は、じつは森のどうぶつたちのヒーローでした。

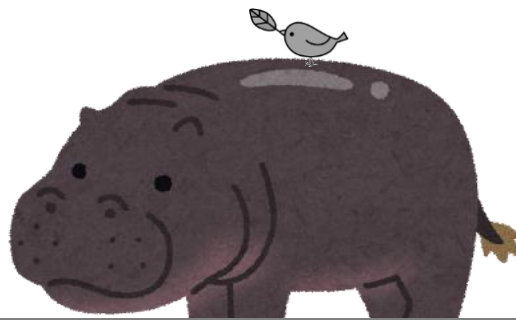
かばのどんなところがすごかったかと言うと、いつもは、のんびりしててなまけものやおくびようものと言われているのに、わるいくろひようを森からおいだして、みんなをたすけたところです。

かばは、ほかのどうぶつからばかにされていたのに、くろひようとたたかう時は、頭のいいたかい方をするなと思いました。かばのなかまをたくさんあつめて森のはしからはしまで一れつにならんですんで、くろひようをおいだしたのがすごいと思いました。

かばはみんなにばかにされていたけれど、みんなのことがすきで、くろひようからたすけてあげたところがカッコイイです。わたしも、こまっっている人がいたら、かばみたいにたすけてあげたいと思います。

さいごに、気になっていることがあります。

それは、かばのおかげで平和になったあと森のお話です。ばかにされていたかばにたすけられたどうぶつたちは、かばとなかよくなれたのかな？わたしはどうぶつだったら、かばに「いまままでごめんね。」とあやまってゆるしてもらいます。そして友だちになりたいです。森のどうぶつたちも、そうだったらいいなと思いました。



【講評】

感想文の最初に幸菜さんは、「なまけものと呼ばれていたかぼの正体は、じつは森の動物たちのヒーローでした。」と自分の読み取った結論をまず書いています。それに続いて、「かぼのどんなところがすごかったか」というと、いつもはのんびりしててなまけものやおくびょうものと言われているのに、わるいくろひょうを森からおいだして、みんなを助けたところです。」と森のヒーローとしたわけを書いています。このように書くと読む人に幸菜さんの感じたことが理由を伴ってはつきり伝わってきます。また「かぼはみんなにばかにされていたのにみんなのことがすきで、くろひょうからたすけてあげたところがかっこいい」とかぼの心の中まで想像して読むことができている、素晴らしいと思いました。最後には、このお話の続きを考えてくれました。自分が森の動物だったら、「いままでごめんね。」とあやまってなかよくするという所から、幸菜さんが日頃から友達を大切にしている姿が目につかんでとてもほほえましく思いました。 (中原 秀樹)

棕鳩十賞（小学校3・4年の部）

「キツネものがたり」 理論社

小布施町立栗ガ丘小学校 四年

つかはら
塚原 ゆきみ

当たり前ではない命

私は動物が大好きです。なので、動物がきずついたり、親子がはなればなれになつてしまう場面を本で読んだり、テレビで見たりすると、いかりや悲しい気持ちでなみだがでてしまいます。「きつねものがたり」は、きつねの家族がきずつくことなく、家族の力で助かるので、私はこのお話が大好きです。

きつねの親子が食べられそうになつたり、けがをしそうになつても助かる場面が二つありました。

一つ目は、きつねたちだけでるすばんしているあなのまわりに、野犬たちがまにかまえている場面です。その時、親ぎつねははねとんだり、転げまわつたりして、ひどいきずで苦しんで、もがいているように見せて野犬たちをおびきよせました。それだけではなく、足あとのにおいを消して後を追いかけてくる野犬たちをまごつかせようとしたのです。私は、親ぎつねが自分たちの体をおとりにしたり、足あとのに

おいを使つたり、いろんな工夫をして子どもたちと自分たちを守つたことが、とてもゆうかんでかしいと思いました。

二つ目は、きつねの通り道をかこんで、ぶらぐのもののかけたわなのわの中に、親子のきつねが入りこんでしまった場面です。私は、父ぎつねは用心深くかしいので、きつとわなにはかからないだろうと思つていたけれど、野犬たちに囲まれたときは、わなと野犬の二種類のてきが相手なので、やられてしまうのではないかとドキドキしました。父ぎつねは用心深いのに、追いつめられたときにしかめつらにたたかいていどんだのはなぜだと思えますか。それは、人間がきつねをつかまえるためにしかけたトラバサミを計算に入れていたからです。しかめつらがわなにかつたすきをついて、父ぎつねがとびだした時、私は父ぎつねと両手を合わせてよろこび合いたくなりました。

この二つの場面で私がすごいと思ったのは、人間は勉強をしないとかしくならぬけれど、野生の動物は、生きていく日々の生活の中で、生きる力やかしくさを深めて

いることです。きつねの生きるための工夫は、私が全く思いつかないことなので、きつねは人間より何倍もかしこいと思います。椋鳩十さんは、そのきつねの生きるための工夫を分かっているのがすごいと思いました。

さいごに、私は動物が生きていく中で、きつつかないで、家族がバラバラにならないで、いつも幸せにくらすことは当たり前ではないのかもしれないと思いました。なぜなら、今まで読んだ物語の中でも、ひとりぼっちのつるをおそうきつね、じねずみの親子をおそうへび、カワウソの親子をおそう人間やわなが出てきたからです。それでも、動物たちは力いっぱい生きようとしています。私はそんな場面を本で読んでテレビで見て、泣いて終わりにはしたくないと思います。私も、動物たちに負けないくらい、私の今の命を大切にしたいし、他の小さな生き物の命のために、役に立ちたいと思いました。



【講評】

ゆきみさんは動物が大好きなのですね。動物が傷ついたり離ればなれになったりする場面を読むといかりや悲しさを感じるが、これは家族が傷つくことなく家族の力で助かるのでこのお話が大好きということが冒頭の部分に書かれています。そして、きつねの家族があぶない目に合いながら助かる場面を二つあげています。まず、親ぎつねが子どもたちを守るために野犬をひきつけて巣あなから遠ざける場面から、きつねの勇敢さや賢さを感じ取っています。次に、再び野犬に囲まれた時に、父ぎつねがとらばさみをうまく使って母と子ぎつねを逃がす場面からは、父ぎつねと手を取り合いたいほどの喜びを感じたとあります。ゆきみさんはこの二つの場面から、野性の動物は日々の生活の中で生きる力やかしこさを深めているのが素晴らしいと考えを深めました。最後には、他に読んだ椋作品から学んだこととして、きびしい環境の中で精一杯生きようとする動物たちに負けないように自分の命を大切に、他の動物のために役に立ちたいと自分の決意をまとめることができました。 (中原 秀樹)

棕鳩十賞 (小学校5・6年の部)

「黒ものがたり」 理論社

飯田市立伊賀良小学校 五年

こすだ はるか
小須田 陽香

時がたつても変わらないもの

私は、『黒ものがたり』を読んで気づいたことがあります。黒は『私』のことを一番の主人だと思い、『私』のことが大好きだということ、そして、『私』も黒のことが大好きだということです。

『私』が鹿児島県に行くとき、黒は『私』が乗った汽車を追ってまっしぐらにかけて行きました。黒は、『私』とはなれたくなかつたし、一緒に行きたかったのだと思います。しかし、汽車は進み、黒はおいていかれてしまいます。その後も、黒は毎日駅に行つて、『私』が帰ってくるのを待ちます。あきらめずにと『私』の帰りを待ちます。もし私が黒だったら、一週間くらいであきらめてしまふと思います。黒の『私』に「会いたい。」帰ってきてほしい。」という気持ち、「きつと帰つて来てくれるだろう。」という信じる気持ち、黒を動かしていたのだと思います。黒は、本当に『私』のことを愛していたという事が、分かります。

『私』は、そんな黒の様子を知り、黒にす

まないことをしてしまったと思います。自分も悲しいように、大好きな黒もすごく悲しんでいるだろうと、思ったのでしよう。大好きだからこそ黒の気持ちが分かり、心がいたんだのだと思います。

そのよく年の冬に届いた安じいさんの手紙には、黒はすっかりなついたらと書かれていました。『私』はほっとしましたが、一方ではさみしい気持ちも感じています。黒が『私』よりも安じいさんになつてしまったら、『私』を忘れてしまふんじゃないかという不安、そしてさみしさを感じたのでしよう。『私』は、いつも心のどこかで大好きな黒のことを気にかけていて、ずっと黒の主人でいたいと思つていたのでと思います。

五年後、安じいさんと『私』は熊狩りに行きます。そこで、安じいさんが熊におそわれてしまいます。黒が熊の背中にかみつくと、熊は黒をつめにかけて投げ飛ばしました。黒は大けがをおつてしまいます。安じいさんが呼ぶと、黒はいたさからうなり声をあげます。『私』が黒に声をかけると、もの悲しげな瞳で見て、もう一度声をかけると、黒は重い傷の体を『私』の方に寄せ

てきました。黒をだき上げると、腕を齒の間に挟み込みましたが、噛みつきませんでした。大けがをして弱っているときに、黒が寄つていったのは『私』でした。黒によつて、一番心を許せるのは『私』であり、一緒にいたいのも『私』であり、一番大切な人もずっと『私』だったのだと思います。黒によつて、ずっとの主人は『私』であり、ずっと『私』のことが大好きで忘れることはなかったのです。

黒は『私』のことを、『私』は黒のことを、お互いに大切なそんな在だと思ひ、離れ離れになつてもその気持ちが変わることはありませんでした。本当の心と心のつながりは、時間がたつても離れていても変わることなく、つながっているものということが分かりました。



【講評】

陽香さんは、感想文の始めに「黒は私のことを一番の主人と思つて大好きだということ、私も黒のことが大好きだということ」と気づいたことを書いています。この気づきをもとにあらすじに沿つて感じたことを書き、最後にまとめています。読む人に分かりやすい、上手な書き方だと思いました。私が鹿児島に行くときに汽車を追つてまっしぐらにかけていく姿や、毎日駅に行つて私の帰りを待つ姿から黒は本当に私のことを愛していたことが分かる、と感じ取っています。また、クマ狩りの時に安じいさんを助けようとして大けがをした黒が体をよせてきたのは私だったことから、一番大切な人は私であり、ずっと私のことが大好きで忘れることはなかったと読み深めています。最後は、題の「時がたつても変わらないもの」は、「本当の心と心のつながり」であるとまとめました。始めから終わりまで自分の気づきを一本の幹のように通した陽香さんの感想文からは、物語の感動がはっきりと伝わってきました。(中原 秀樹)

棕鳩十賞（中学校の部）

「野生の叫び声」 ポプラ社

喬木村立喬木中学校 三年

まきの なつき
牧野 夏生

それぞれの痛み

サル達は、岩山から何を思っただろう。そして、染まる山や海を見ていたのだろうか。そして、もしサル達が言葉を話せたら、一体どんなことを叫んだのだろうか。

サル達のねぐらがある原始林の木が切りはらわれたむき出しの斜面が、陽の沈んだ瞬間に真っ赤に染めつくされる様子は、まるで傷つけられた山肌の痛みを表すようです。

おりで囲まれた中で毛づくろいをしたり、周りのサルとじゃれあったりしている動物園で見るサルしか知らない私にとって、この作品に描かれているサル達は、そんなサルとは全く違う、自然と共にたくましく生きていく様子がとても印象に残りました。

私が住んでいるこの喬木村とは全く様子が違う亜熱帯の山の風景の描写に、まるでその場にいるかのような感じになりながら、サル達の思いを想像して、人と自然のかわり方というものは、どういふ姿が良いのだろうかということに改めて考えさせら

れました。

私は、サル達が山で作業をする人達のお弁当を取ってしまおうのは、単純にエサが欲しいだけなのだろうと初めは思っていました。しかし、読み進めるうちに、果たしてそれだけなのかという疑問を持ちました。

サル達は、自分達が住むところを荒らされ、自分達のすみかを守るための必死の抵抗だったのだということに気づかされました。

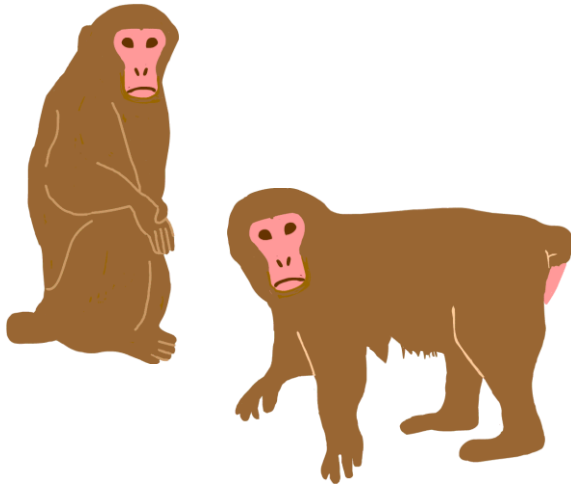
山じゅうにみなぎる静けさの中で練り広げられていた、小鳥の群れの羽音や鳥達の様々な声、そして見張り役のサルの鳴き声による不思議な音楽会は、そこがまさにサル達の楽園の象徴だったのだと思いました。そんな楽園が、休みなく続く木を切り倒す騒音によって掻き消されてしまったことや、あげくの果ては、その日の朝まで原始林だった自分たちのすみかが、たった一日で丸裸にされたという表現が、その疑問に答えてくれました。

サル達の、山で働く人達のお弁当を取ってしまうという抵抗は、やがて人間達の知

恵や技術といった圧倒的な力の前になす
すべもなく、怒りとあきらめの気持ち
が入り混じって叫び続けることしかできない、
無念さに変わっていったように感じとれま
した。

一方で、過酷な山の現場で働く人達にと
つては、唯一の楽しみであるお昼の弁当を
奪われてしまい、「石を投げつけてみたり」
や「仕事をおっほり出して」という、くやし
さがあふれる表現を通して、山で働く人
達も、木を切る仕事を通じて必死に生き
ているということがはっきりと伝わってき
ました。

木材を切りだすことを仕事にしている人
達、そうした人達が切りだした木を使った
家具などを私達は使います。もしかした
ら私が使っている家具なども、こうした背
景があるのかも思いを巡らせました。



【講評】

「サル達は、岩山から何を思っ赤に染まる山や海を見ていたのだろう。」
と書き始めた牧野さんの追究は、「傷つけられた山肌の痛み」や「必死の抵抗」
を経て、サルたちの「怒りとあきらめの気持ち」「無念さ」でいったん結論づけられ
ます。ところが、「一方で」と書き出す段落で、「人」の視点からの考察が行われま
す。すなわち、「山で働く人達も、木を切る仕事を通じて必死に生きている」と。
サルの視点からサルに共感して読むだけでなく、人の視点からも考えて読み進めた
牧野さんの読み方に、はっとさせられました。この物語の背景や、提示された課題
に対する解決方法はそう単純なものではない、ということに改めて気づかされた思
いがします。それを端的に示した題名も素晴らしい。

「人と自然とのかかわり方」という課題に対して、一般化して結論づけるので
なく、私たちが使う「家具の背景」に思いを巡らせることで、ひとつとではないのだ
と暗示するように書き終えている点にも教えられました。 (池上 幸治)

棕鳩十賞（一般の部）

「るり寺物語」 ポプラ社

安曇野市

すぎもと ゆきえ
杉本 幸恵

豪勢僧正の言葉から

長野県の隣の新潟で生まれ育った私は、棕鳩十と言えば「動物のお話」という印象を持っていました。恥ずかしながら、この作品のように、示唆に富んだ民話調のお話もあることを知りませんでした。だから、ますますさらな気持ちでこの作品を読み進めました。

印象に残った豪勢僧正の言葉がありました。

それは、大島為基が織田の大軍から娘であるるり姫を守るために、るり寺に姫を預けた帰り際、為基に二度と会えないであろうことを予見して語った「寒椿は、ちるしゆんかんまで、赤あかと、ほんに赤あかと、かたちもくずさずもえております。こんなにありたいと、わたしは寺のまわり一面に、植えたのであります。」という言葉です。

この言葉は、立派に戦い抜くように為基を励ましながら、自分もそうある覚悟だと静かに伝えた言葉だと感じました。つま

り、これは為基に向けて語った言葉であると同時に、るり姫を預かる自分の決意を自分が再確認するための言葉でもあったと思います。しかも、その決意は椿を植えたときからずっと変わらず、今まさにその椿が花をつけるまでに成長しているのです。決意は、信念と言っても良い程の強い願いに成長していたことでしょう。きっと、雪景色の中、二人を鼓舞するように寒椿が赤あかと、一面に、見事に、咲き誇っていただろうと思います。

この後、為基の守る大蛇が城は、豪勢僧正が予見したように城全体が赤い炎に包まれ、為基は最後まで気丈に戦うも、火の海に沈んでしまいます。また、るり寺も炎に包まれます。しかし、寺は焼け落ちたものの、雷鳴とともに大雨がざんざんと降り出し、豪勢僧正は九死に一生を得ます。武力で戦い、死んでいった為基と祈りによって助かった豪勢僧正。二人とも同じように自分の信念を貫いたにも拘わらず、結果は正反対となりました。

この結果から学ぶことは、武力に武力で対抗しても良い結果は生まれない。信念を

持つて非武力で対抗することこそが生き延びる道である、ということではないでしょうか。豪勢僧正も、火が迫り来る中「いかなる力でも、うばうことのできないものがあることを、むぼうなものどもにお示しくださいませ！」と叫んでいます。

奇しくも、現代社会ではロシアとウクライナの間で戦争が起っています。そして、日本は毎年防衛費に膨大な金額を割いています。まさに戦争の準備をしているかのようです。そうではなく、平和的な方法で紛争の火種を解決していくことが大切でしょう。

私は、この本から改めて「戦争をしない」という強い信念を持ち、いかなる力にも屈せず、その信念を貫き通すことこそ大切だ、と教えられた気がしました。



【講評】

杉本さんは印象に残った言葉として、豪勢僧正が大島為基を見送る場面の「寒椿は、ちるしゅんかんまで、赤あかと、ほんに赤あかと、かたちもくずさずもえております。こんなにありたいと、…」を挙げます。そこに、二人の「覚悟」「決意」「信念」「願い」を感じたというのです。さらに、二人とも同様に自分の信念を貫いたにも関わらず、結果が正反対であったことから「非武力で対抗することこそが生き延びる道である」と学んだと述べています。

終末には、「いかなる力でも、うばうことのできないもののあることを、むぼうなものどもにお示しくださいませ！」という豪勢僧正の叫びを引き、今まさに世界で起きている戦火に対する杉本さんの思いが述べられます。その、平和への願いや非戦の信念に共感しながら、「歴史には、今の時代を生きぬくヒントのようなものがたくさん隠されている。」「歴史小説に生き方を学ぶ。」という言葉思い出しました。

(池上 幸治)

優秀賞（小学校1・2年の部）

「三ぼん足のイタチ」 理論社

鹿児島市立大龍小学校 二年

ひがし ちなつ
東 千夏

すなおになりたい

「すなおにきいたほうがたまるよ。」
きかんぼうのイタチが、へびとたたかうところを読みながら、わたしは心の中で言いました。しんばいしたとおり、きかんぼうのイタチは、へびにまきつかれてあぶないめにあつたり、にんげんのわなにかかつたりしました。さいごは、三ぼん足になつてしまいました。だけど、どんなわなの名人がかけたわなにもかからなくなりました。
「おかあさんイタチの言うことがきけなかつたのに、なんでわなにかからなくなつたのかな。」
とわたしは思いました。
四ひきのイタチのかぞくは、くいしんぼうで、なかよしでした。おかあさんイタチは、子どもたちにいろいろなことを教えました。バツタ、カエル、ネズミ、へびやにんげんのおいを教えました。えものつかまへ方も教えました。まるでにんげんのかぞくみたいです。
きかんぼうのイタチは、へびにまきつかれ

てあぶないめにあつていたのに、一ぴきだけはおかあさんイタチのまねをせず、わなにかかつてしまいました。わなをみまわりにきたにんげんにおかあさんイタチはおならをふきかけて、そのすきにわなをかもうとしていそぎすぎて、きかんぼうのイタチの足をかみました。三ぼん足になつてしまいました。にげることができませんでした。
きかんぼうのイタチは、じつさいにわなにかかつて、わなのおいをおぼえたから、わなにかからなくなつたのだと思います。おかあさんイタチのまねじやないやり方をして、こわい目にあつて、もう、もうぜつたいにわなにかかりたくないはずです。でも、それだけじゃなくて、おかあさんイタチが自分をたすけるためになんかばつてくれたから、きかんぼうのイタチは、うれしくて、すなおにおかあさんイタチの言うことがきけるようになったから、わなにかからなくなつたのだと思います。
わたしは、しゅうじとピアノをならつていきます。先生やわたしのおかあさんからちゆういされるとイライラします。
「すなおにきいたほうがたまるよ。」

となん回も言われました。おかあさんイ
タチがいつしょうけんめいにきかんぼうの
イタチをたすけていたみたいに、先生やか
ぞくもいつばいおうえんしてくれているか
ら、わたしもすなおにききたいです。すな
おにしたほうが頭に入つて、しょうらいい
ろんなことにやく立てられそうです。



【講評】

千夏さんは書き出しのところで、「すなおにきいたほうがためになるよ。」とこのお話を読む中で自分の心に浮かんだ言葉をまず書いています。とても印象的な書き出しになっていて読む人の気持ちを引きつけます。そして、「きかんぼうのイタチは、なぜわなにかからなくなったのかな。」という疑問を持ちます。それに対して「わなのにおいを覚えたから」「もうぜったいわなにかかりたくないから」「おかあさんイタチが自分をたすけるためにがんばってくれたのを見てすなおになったから」ときかんぼうのイタチの気持ちを考えて想像を深めている所が素晴らしいと思います。さらにピアノと習字を習っている自分がよく言われている言葉「すなおにきいたほうがためになるよ。」が再び出てきます。この言葉は、日頃の自分に向けられた言葉でもあったわけです。最後の所では、これからは人の言うことを素直にきいていきたいとまとめました。千夏さんにとって自分を見直すよい機会になった読書体験になりましたね。

(中原 秀樹)

優秀賞（小学校3・4年の部）

「屋根うらのネコ」 あすなろ書房

川口市立安行東小学校 三年

すずき しもん
鈴木 紫文

ネコにもネコの理由がある

読み始めてすぐに、ぼくはぶちネコが嫌いになりました。となりの家の若ドリやスズメだけでなく、飼っていたリスのキチ公までさらってしまったので、ひどいやつだなと思っただけです。のらネコのくせに人間をこわがらないし、凶々しいなと思いました。だから、ぶちネコをなんとかつかまえるようとする野田さんたちを応援しながら読みました。でも、ぶちネコのほうがりこうで、わなにもかからないので、ぼくは悔しかったです。

ぶちネコがいなくなったと思ったら、家の屋根うらで子ネコを生んでいたのには、びっくりしました。でも、ぶちネコは子どもを育てるために食べ物が必要だったから、悪さをしていたんだなとわかりました。それでも、さらわれた動物がかわいそうだったのでお母さんにぶちネコの話をして、

「めいわくをかけるし、命も取るから嫌なネコだね。」
と言ったら、

「そうだけど、人間も鳥や牛、ぶたのお肉を食べるでしよう？魚も食べているよね。」
と言われてしまいました。

少しくやしかったけれど、ぶちネコは生きるために一生けんめいだったから、人間に負けないぐらいの知恵をつけていたのかなと思いました。そしておかあさんネコになつて、子ネコのためにもっと強くなったのかもかもしれないと考えました。太郎くんのお父さんも、ぶちネコが人間と同じように子どもを守っているのを見て、今までの悪さの理由がわかったから感動したんだと思います。

ぼくは、人間の理由ばかりでぶちネコのことを嫌なネコだと思っていたけれど、ネコの理由も考えたら、すごいネコだったんだと思いました。ネコにはネコの理由があつて、相手の立場で考えたら新しい見方ができることも、椋鳩十さんは伝えたかったのかなと思いました。



【講評】

「読み始めてすぐにぼくはぶちネコがきらいになりました。」と紫文さんはまず第一印象を率直に書いています。その後も、「のらネコのくせに人間をこわがらないし、凶々しいと思いました。」や「ぶちネコのほうがりこうでわなにもかからなかったの、ぼくはくやしかったです。」とぶちネコへの思いが書かれています。ところが、お母さんの会話から少しぶちネコへの見方が変わります。「ぶちネコは生きるために一生けんめいだったから人間に負けないぐらいの知恵をつけていたのかなと思いました。」と今までとは違う面からぶちネコのことを考えています。そして、太郎くんのお父さんの気持ちまで想像して、感動したわけを深く読み取っています。紫文さんは初め、人間の立場で考えていましたが、最後にはネコの立場に立った考えに変わりました。様々な立場の人のことを思い、物事を他の面からも考える大切さを感じる良い機会になったと思います。このことを新しい作品を読む時や日々の生活にもいかして行ってほしいと思います。

(中原 秀樹)

優秀賞（小学校5・6年の部）

「黒ものがたり」 理論社

喬木村立喬木第一小学校 六年

まつしま きょうか
松島 杏佳

離れていても忘れないもの

黒という犬は主人公である私が一年間飼ってきた犬だ。しかし、主人公が仕事の都合で鹿児島県に行かなければならなくなり、黒を主人公が飼っていたのは一年間だけ。その後の五年間は狩人の安じいさんが飼っていた。

この物語は、離れ離れになった黒と主人公との愛情や、主人というものについて考えさせられる物語だ。

まず、私は、この物語を読み始めて胸が締め付けられるような気持ちになった。その場面とは、黒と主人公が五年ぶりに再会した場面だ。黒が、いきなり主人公に飛びついていった時、安じいさんに「ここら、だんなさまの洋服がよこれてしまうぞ。」と言われると、黒は安じいさんの後ろで小さくなってしまった。その姿が主人公にとっては安じいさんを本当の主人と思込んでいたのかのように見えたからだ。主人公がはじめの主人であるのに、黒が主人公を第二にしていることを知り、胸が締め付けられ

るような気持ちになった。

そう思っていた私だったが、その後の展開を読み進めると、黒と主人公の真の愛情を知ることになった。

黒と主人公との真の愛情を感じた場面は、「安じいさんを助けようとした黒が、クマに傷を負わされ苦しんでいる時、安じいさんではなく、主人公に体を寄せひざに頭をのせた場面」だ。五年間黒を飼っていた安じいさんがけがをした黒に触れようとしても、噛みつきこうとし触れさせなかったにも関わらず、一年間だけ飼っていた主人公に体を寄せたのだった。この行動は、最初に黒を育てていた主人公だけが本当の主人として刻みつけられていることを意味していた。

もし私が黒を一年間育てていて、安じいさんが五年間育てていたら、主人公のように、黒にとつての本当の主人になれるだろうか。主人公が黒にとつての本当の主人になれたのは、一年間注ぎ続けた愛情を黒がずっと忘れていなかったからだと思う。そして、その愛情は、五年間も離れ離れになつていても忘れない、黒にとつてとても大

きなものであり、育てた年月の差を乗り越える深いものだったのだ。

また、主人公は、黒を手放してからもずっと黒のことを愛し続けていた。町で買ったブタの塩づけを黒に送ったり、黒のさびしそうな様子を聞くのは、心がとがめられるような気がした。離れ離れになっても、黒を忘れた瞬間は一度たりともなかったと思う。

そして、五年間も育ててくれた安じいさんを失うまいと、自分の身を挺してまでクマから守り、必死でクマの背中にかみついた黒は、飼い主への忠誠を自分の身より優先している。私だったら、大切な人が危険な目にあっている時、自分の命を危うくする覚悟をしてまで行動することは、とても難しいことだと思う。それだけ黒は大きな覚悟をし、安じいさんを助けるために大きな相手に立ち向かっていったのだ。

黒ものがたりで、私は、人間と動物の離れていても忘れない深い愛情を何よりも強く感じた。五年間も会えていなくても、心の中に残り続けているお互いへの思いは、相手のことが忘れられないような存在になっ

ていたからこそ、離れ離れになつてなお、より深まった愛情だと思ふ。

この物語の黒は、主人公が愛し続けてくれた時の思いを感じ、最初に育てた主人公だけを本当の主人と思いつけていた。そして、二人から学んだ主人とは、「ただ愛するだけではなく、お互いに愛することを続け、その気持ちを伝えられてこそ本当の主人」だと感じ、自分の思いを伝えて、発信していくことが、この先へ続いていく架け橋になると二人から学んだ物語だった。



【講評】

杏佳さんは最初に、「この物語は、離れ離れになった黒と私との愛情や、主人というものについて考えられる物語だ。」と話を大きくとらえた上で、ていねいに黒と私の愛情を読み深めています。特に安じいさんを助けようとした黒が熊に傷を負わされて苦しんでいる時に私に体を寄せ、ひざに頭をのせた場面から真の愛情を感じ取っています。黒の私に対する愛情は、「五年間も離れていてもその年月を乗り越える深いものだった」と読み深めているところが素晴らしいと思います。さらに言うと、自分の伝えたいことを効果的に表すためには、読み返してみても省ける箇所があれば省いた方がよい場合もあると思います。最後には、私と黒の愛情は「相手のことが忘れられないような存在になっていたからこそ、離れ離れになつてもなお、より深まった愛情」とまとめています。さらに、主人について考えを深める中で、「自分の思いを伝えて発信していくことが、この先へ続いていく架け橋となる」という言葉は、今後に向けたすがすがしい決意の表れと感じました。

(中原秀樹)

優秀賞（中学校の部）

「野生の叫び声」 ポプラ社

喬木村立喬木中学校 一年

おくた こひろ
奥田 心優

「人間と動物の共存」

この作品は、自然豊かな島を林道をつくるために山を工事してしまい、山にいるサルたちの領地を荒らしてしまったという物語です。

この作品を読んで私が心に残った場面が三つあります。

私が心に残った場面の一つ目は、主人公が山の林の中で、サルや虫の声や羽音を聞いている場面です。これは、人が手の入れたことのない自然豊かな山でしか味わうことができず、その様子を主人公は音楽会に招待されている気持ちになっていてそこから、この山のその自然豊かな所が大好きなんだと思ったからです。私の母の実家はとても山奥にあり、そこに行くとき川の音や様々な動物が見れてこちよいい気分になるので、ここにはとても共感しました。

次に私が心に残った場面は、原始林のしや面が人間の手によつて頂上まで切りはらわれてしまった所です。その山の山はだむき出しになっており夕陽で赤くそまっ

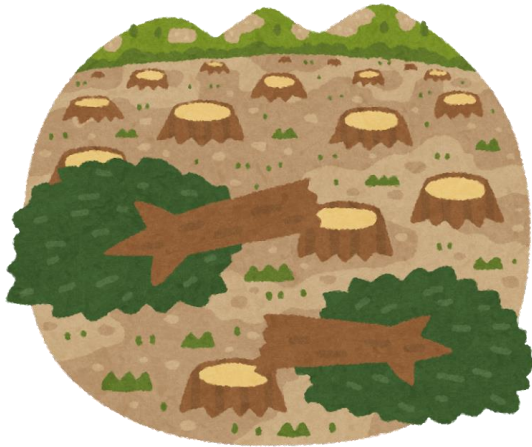
ていることを椋鳩十さんは「血のように」と表現していて、その様子のむごさに胸をいためる主人公の気もちを読者に伝えていたんだと思ったからです。私はこれは山だけには限らず、自分の大切な場所、しかもそこがなくなることで自分だけではなくいろんな人や動物が悲しむことになる所だとよけいに悲しくなりました。

次はこの物語の最後のサルのむれが叫びつづける場面です。主人公はその叫びから、サルたちの領地を勝手に荒らす人間に対するいかりに感じていて、私はここを読んでいてとても複雑な気もちになりました。なぜかという、人間は山を切りはらわないと林道をつくることはできない、しかし山に手を入れてしまうと、自然豊かな山がいつきにこわれていってしまうし、山に住む様々な動物の住みかが失われてしまう、そこで私はこの作品は現代のことを表わしているなと思いました。現代の社会もたとえば海洋ゴミのせいで海に住む動物たちが無さんにもたくさん亡くなってしまう、木の切り出しで森林はかいつながってしまったいたり、全ては人間のせい

で何も関係のない動物たちを巻きこんでしまっているという問題があります。

今、世界ではそれに対していろんな活動に取り組んでいます。その問題は良くなっていることもあれば一向に良くなっていないこともあります。良くならないのは、活動に取り組んでいるのはこの世界の

ごく一部だからだと私は思っています。そんな人たちだけではなく全ての人にこの作品を読んでもらってこの世界の人間と動物たちが共に生きられる世界をつくってほしいと思います。



【講評】

奥田さんが「心に残った場面」として挙げたのは、「原始林が切り倒される前の豊かな自然を描いた場面」「原始林の斜面が切り払われ山肌が血のように赤く染まった場面」そして「サルの群れが叫び続ける場面」です。これら三つからは、題名「人間と動物の共存」につながる一貫性が感じられます。

奥田さんは、最後の場面を読んでいると「とても複雑な気持ちになりました。」と述べ、「人間は山を切りはらわないと林道をつくることはできない、しかし、山に手を入れてしまうと、自然豊かな山が一気にこわれていってしまう…」と「人間と動物の共存」というテーマに言及します。そして、これが現代社会にも通ずる問題であると指摘し、「全ての人にこの作品を読んでもらって」、人間と動物の共存に向けて、多くの人々が活動に取り組んでいくべきである、と自身の願いを率直に語ります。感じたことや考えた経過を、素直に丁寧に書き進める書きぶりに魅力を感じました。

(池上 幸治)

優秀賞（一般の部）

「るり寺物語」 ポプラ社

長野市

やまぐち しんいち
山口 真一

「父と娘の絆」

「大島為基とるり姫」

大島城城主の大島為基。超人的なまでの鉄砲の腕を持ち、圧倒的な軍勢を誇る織田軍が攻め込んでくる危機を察すると、城内の女子どもは事前に退避させ、最期まで孤軍奮闘。城と運命を共にした天晴な城主だった。この為基の娘が「るり姫」である。物語では、さまざま人物の生き様や死に様が描かれるが、るり姫は父の為基をどう思っていたのだろうか。本文中には、それとわかる直截的な叙述は見当たらないが、わずかな手がかりと行間から推察することは可能である。

わがまま息子・鬼太郎の希望を叶えてやるため、物量作戦でるり姫を嫁にもらおうと、河野又吉郎が城を訪れる。相対したのは父の為基で、当のるり姫はその場には居ない。傲慢ともいえる申し出に対して、為基は「おことわりもうす。おひきとりくだされい。」と返すが、その様子は「かん高

いどなりつけるような調子」である。威厳ある城主のふるまいとすれば若干の違和感があるが、おそらくは城内の別室で耳をそばだてている姫にも聞こえるように、あえてこのような声で言ったのだろう。為基の思いは、続く「ものとの交かんは、おことわりもうす。」に端的である。こうした父の毅然とした返答の態度に、娘はどれほど安心し、絶対的な信頼度を高めたことだろうか。

もしここで又吉郎の物量（二俵ずつ米俵を積んだ百頭の馬）に目がくらみ、ほいほいと娘を差し出すような男だったならば、るり姫の生来の性格を考えると、父に絶望し、親子の縁を切つてもどこかに身を隠してしまつたのではないだろうか。

るり姫は、幼い頃からるり寺の豪勢僧正のことが大好きだった。織田軍の大攻勢を前にして覚悟を決めた為基は、娘を豪勢僧正にあずけようと、姫を連れだつて寺を訪れる。かくして姫は寺に匿われることになるが、当時のるり姫は十三歳。しかし、なぜ自分が寺に連れて来られたのか、父にはどんな決意があるのかなど、直に話を聞

かされずとも、その「思い」は充分に理解していたことだろう。「氣じようぶなるり姫も、目にいつばいなみだをためて、父のうしろ姿を見送った。」という叙述の中に、父との今生の別れを悟った十三歳の娘の思いがあふれんばかりに詰まっている。るり姫の「なみだ」にはどんな気持ちか隠れていたのか、読む者の心に強く訴えかける一文だ。

そんな父の「思い」は、まるで豪勢僧正に乗り移ったかのように、寺を織田軍の兵たちで囲まれて火攻めに遭った絶体絶命の場でも「火でも、やりでも、かたなでも、力では人の心をうばわれませぬぞ。」という言葉に発露している。これは、かつて河野又吉郎に言い放った父の言葉とその根を同じくしている。きつと姫にとつては、命がけで我が身を守ってくれる豪勢僧正に、亡き父の姿が重なっていたに違いない。

「るり寺物語」とは、悲劇的なまでの父と娘の絆の物語でもあったとつくづく感じ入った私は今夏（令和五年八月）、猛暑の中を下伊那郡高森町にある大嶋山「瑠璃寺」を実際に訪れ、境内を見学したり、T住職とお話させていただいたりした。去り際に、

境内の向こうを一匹のネコが駆け抜けていったように見えた。寺のパンフレットによると、この寺には「みやあ坊」なるネコの住職が棲んでいるらしい。私は思う。今も、父を慕い、豪勢僧正を敬愛するるり姫の魂は、愛らしいネコに宿りながら、大好きだったこの地の、この境内で生き続けているのだ、と。



【講評】

山口さんは、大島為基が河野又吉郎、鬼太郎親子と対峙する場面を取り上げ、為基が放った言葉「ものとの交かんは、おことわりもうす。」に、父為基の毅然とした態度を、そして、娘るり姫の「安心」「信頼」を見えています。また、豪勢僧正にるり姫を預けて為基が去るときのるり姫の「なみだ」に、「父との今生の別れを悟った十三歳の娘の思い」を読み取ります。いずれも、「父、大島為基と娘、るり姫の絆という視点から読む」という読み方から生まれた読みであり、この作品の読み方にそういう視点があったのだと教えられました。

さらに、「火でも、やりでも、かたなでも、力では人の心をうばわれませぬぞ。」という豪勢僧正の言葉が、「かつて河野又吉郎に言い放った父の言葉とその根を同じくしている」という指摘は大変鋭いと思います。金や力、武力や権力で何でも思い通りにできるとする傲慢さに対する痛烈な批判として、また椋さんの思いの表出として、胸に響いてくる言葉だと共感しました。

（池上 幸治）